
生かし屋キラー

活字の鍊金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生かし屋キラー

【NZコード】

N8247Y

【作者名】

活字の錬金術師

【あらすじ】

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

ムカーワ（前書き）

この物語は自分が描いた漫画の読み切りをすこしイジり、小説にしたもので、あまり長くはやらないので少しの間だけおつきあい下さい

ムウーワ

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように
生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

エピローグ／依頼／

「じゃあな」「また明日」「おう！仕事がんばれ！」

飲み会が終わり店から出でくる男たちの声が響く

「里田武か・・・」

突然空から声がした

里田武と呼ばれた男はふと上を見上げる

ビルに立っている男が口にはいった・・・

「殺し屋キラー執行！－！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時はさかのぼる・・・

ボリツボリツせんべいをかじる音がきこえる建物

そこには『キラーン家』と書いてある布がぶらさがっている

ザーザツザザーツゴゴゴゴゴー！

ちょうど台風の来る時期であった

ガラツ！－！－！－！キラーン家とかかれた建物の戸が開かれる

「いらっしゃい・・・なんかあんの？」

ゴロロロロッロ！

戸を開いた男の後ろで雷が鳴る

「殺してほしいんだ・・・」

「里田を・・・アイツを！－！－！」

「アイツのせいで！－！アイツのせいで俺の会社はNOONYとの交渉
が・・・・・！」

「ふうーん」

興味なさそうな声がきこえる

「そいつどこにいんの？ どんな顔？」

男は懐から写真を取り出し 里田がよくいく飲み屋を教えた

「さて仕事すつかなー」

→人を殺し依頼主にみせ金を受け取る
シユミと自分で言つてゐる→

△ウーラ

里田が見上げた先には仮面をかぶつて 黒い服を着ている男がいた

男は「ちりくとんできた

二十一

高層ビルの上から・・・跳んできた

高層ビルだ！－－高層ビルの上から跳んできたんだ！－－自殺！？

見事に着地した！しかし男の足はまつたく震えていない

黒い男の左目が光つた 『ゾゾツゾゾツ

『身長
171.
5cm』

『ウエスト70cm』

『B C D が C O F が C』

腰から100cmには

『この情報を元に死体作成・・・・』

כָּלְבָּנָן

男の右手から光が出た

そこには里田の死体があつた。・・・

一 僕の死体！！？？

三十一

手！？暗くてよくわからないが五本の棒のついてるものがかおに近づいてくる

モルヒネ

三才劇日本

通志卷之二

ただただ自身のか

ビチビチビチバチツバチツビー！

黒い男は言つた

俺は殺し屋ギターと呼ばれていた。でも実際には人を殺していな

死体のダニーを依頼主に見せて金を受け取るつていうのがおれの手
口だ

四〇六

おれの作つた理想郷へ

「アーヴィングは、アーヴィングだ！」

光が飛び散るとともに

丸い、広場のようなどころについた

城の事は、アーヴィングの「アーヴィングの死」に記載がある。

どこでみたことがある上

「あーここに来たやつはみんな既視感があるみたいなんだよ」
「うかうかでみたことがあるよーた感覚だ

「よくわかんねーけどなあ」

「！そだ！！！なんなんだよ！」「…？」

「！」？あームウーウーフーといひだよムー大陸つてしつてるだろ

それから名前とった

おれに死体ダミーを作られたやつらはみーんな！」にいるんだよ」「はつ！？」みわかんねーよ…？なんでこんなとこにいなきやい

けねーんだよ」

「はあー…説明だるい…！」

「お前らが生きてるつてばれたら厄介だからだよ…！」

「んじゃ死体ダミー見せて金もらつてくるからーちよつとまつてろよおー！」

「ちよつ…おつ…」

「……つ…」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バタッ

「どうぞー！」れくらい痛めつけたけどコレでどうだい？」

「ああ…！」いつだ…！」いつを殺してほしかったんだーありがとう…！」

「ん」

「ん？」「ん」「ん…」

「ああ！金ですね！」

バタッ！

男は大量の金が入ったキャッシュケースを出した

男は依頼主から金を受け取り光を出しながら消えてつた

ジリジリビツ・・ビツ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あー……おめー……おれはこれか、アビ、アレば、こいんだよー。
「あー、あー、つむせーなー、だー、かー、りー、リードー……おまえは暮
りすんだよー。」

一
な
ん
で
！

「これが何でたよ！ 何で理解できなしんだよ！」

おまえはあいつの世界で死んだことはしたのか？」「死んだら死んでるやつだよ。おまえをあいつの世界においてつたら、おまえが見つかって、おれがペテン詰つて」とばれちゃうだろ？」

「アラビア語」

「なんか言った？」

卷之三

「・・・あつ！・・」

「ちよっと一緒に来てくれ……付け根が痛む……」

「何で不^レかこ^ムな目はあわなきやいにないんだよ」

「なあお前キャラ一いつで書つてゐるけど本名なの?」

「ん、ああすぐにわかるよ」

[2]

「…周囲は噴水とかあってきれいなのにここだけ汚いな…」

「建物とか黒いだろ？ これさ、でかいガスバーナー使つたりしてる

そいつが黒焦げにしちゃつてんの

「怖いな」

「ああ、怖い！」

力チャン!!

「おー美央！付根が痛むから見てくれよーーー」

美人がそこにすわっていた

真っ黒な髪の毛が肩までいって

フードのついた服の上から工場の作業服を着ている

童顔で赤い頬をしていて大きな目

里田のタイプであつた

「んー・・・また痛くなつたのど?・みせてみて」

美央が立つた

「うあつ！？」

里田はおもわず叫んだ

「へつ？」

口を大きくしてぽかーんとしている美央

「フードの上に作業服はわかるぞ・・・わかるぞ・・・」

「ミニスカに二ーソックスつておまああああああつ！？！？！？！？」

萌えーーーーー

「変態めが・・・」

鋭いキラーの声

「おまえに二ーソックスのよさがわからないか！ 絶対領域の黄金比を守つてるじゃないかこの美央つて子！！！」

ちなみに黄金比は $4 : 1 : 2 : 5$ だ！！！」

「いやー 実にいい絶対領域だ」

「ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「え・・・・」

「もう一回言ひつね ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「気持ち悪い・・キモ・・・キモチ・・・ガーン」

キラーはため息をついた

「おい美央んなことより見てくれよ

「あつごめん えつとお・・どこ?」

「右の肩だよ」

「ちょっとみせてみてー」

キラーは服を脱いだ

そこには3つの縫い線がはいつていた

美央の手が動きナイフのようなものを取り糸を出したそして注射器をだし

とても複雑な作業をしている

キラーのからだを縫つているよつにもみえただ切断してゐるよつにも見える

「医学方面に特化していない自分にはよくわからぬー 何やつてんだこれ」

「んあ？ 医学方面に特化してもわかんねーよこれ 神様からの天罰だから」

「はあ？」

「よし！ オッケー！ ちょっと動かしてみてよー！」

キラーは腕をぶんぶんふった

「おお 痛みが消えた、ありがとーー。また痛くなつたらくるよー。じやつ」

「あつ ちょっとまつて 骨と筋肉のチェックするからそこに寝て」

「んあー」

下には大量のパイプのようなものとワロカードのようなものが大量にある

機械と聞いて頭に思い浮かべられるようなものだ

そこには平らな板がありそのうえに大きな板があいてある

キラーは板と板の間に横になつた

「ちょっとこつからは見ちゃダメね」

美央は里田の皿を手で覆つた

「えつ？」

「すこしがロテスクだから」

びしつべちょつぶつ べちょべちょうぶつ！

「ねえ 何で二ーソックスなんかすきなの？」

「俺はこの世の美だと思ってる、男はたいてい二ーソックス大好き

だよ」

「ふーーん 生人はじろじろみてこないのに・・・」

「はい！？なんかいつた？」

「なにもいつて『お楽しみ中わりーが、終わったんで帰つていい？』

美央が話しているのに男が叫んだ

「ちょっとまつてすぐに結果出るから」

「あーいーよいーよ、結果は後でメール送つてきてくれよ」

「んじゃつ いくぞ里田」

「わかつた ジャーあとでメール送るね」

「そろそろ隠しやめてくれない？」

「あつごめん」

「あまり体いためちやだめよ生人」

「おうつ ジやあな！」

バタアソッ

「ふうーん・・・二ーソックスつて・・・萌えるんだあ・・・」

「！何考えてるんだ・・・あたし」

「おまえキトつていうの？」

「ん、あー そうだけど? だからさつきいつたろ? すぐわかるつて」

「あいつおれのこと生人つてよぶからさ」

「おあついねー」

「たしかに暑いな」

「そつちじやなくて」

「？」

「それにしてもお前のその体どうしたんだよ・・・」

「縫い目ばっかりじやねーか」

「天罰だよ」

「天罰?」

「神様がさ おれに与えた天罰 『おまえのような人間には天罰が必要だつ』て!」

「だからおれは今人を殺さない殺し屋やつてんだ」「え?」

「いや・・・言い過ぎた なんでもねー」

「気になるだろが!!!!」

「うつせえな!なんでもねー一つつてんだろー」

「いや気になるつて!」

「うーるーさーい」

「いづれかわかるんじゃね?」

「いづれかつていつだよ」

「しらね」

「なんだよー おしえろよー」

謎の男達

謎の男達

「おまえに教える義理はないよ」

七言一題

「ゴソ・・・ゴソ・・・ゴソ・・」

「なんだなんだ……どうしたんだ誰か叫んでるぞキラー！」

路地から大量の人がこちらにむかってはしつてくる

「眞理の爲めに死んでやる。」

グサツ

バン！！！

飛び散る資料 跳ね上がるキーボード

筋萎縮！？「うそ！」

・ アイツ……筋萎縮になる理由なんてないのに……せこぱり

「早くいかなせや・・」

「うつ・・・」

「キラー・・・」

大量の男達に囲まれている中

目の前でナイフで刺されている キラーが居た。

キラーは刺される前に震えていた・・・

そして今も震えている

ゆっくり拳を振り上げたキラーは ナイフを刺したまま体を捻る

刺した人はすこし後ずさりする

ブオッ！・・・

拳がまっすぐ 捻りながら前に進むその拳は キラーを刺した奴へ
当たる。

そいつは拳の力で飛ばされた

ズ！・・・キ！・・・

「！」

「うつ・・・」

「キラー・・・どうした体が震えてるが・・・」

「筋肉が・・・」

「え？」 「筋肉が・・・」

「筋肉が言つ」とを聞かねええええ！・・・ うあああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ

キラーの叫びで里田は少し後ずさりする

ダッダッダ 左から足音がする

里田は左をみた

そこには 拳を突き出し 走つてくる男が居た
男は身を乗り出し飛び出してきた

ガツ！

里田は体重を左に移動し 右手で飛んでくる腕をつかみ 左手で男の下半身を抱いた

そして 体重を右に移動し 右手をいきおいよく 下におろし 左手を勢いよく上に上げ 投げ飛ばした

「いつきなりなぐりかかつてくるつてどうこうつ事だボ・・・」

言い終わる前に新手の男がやって来た

男は手を地面におき 下半身を里田に伸ばして 跳りを入れようとしてきた

里田は手を上に上げながら後ろに飛んだ
そして落ちそうな下半身を足で蹴り上げ、上に上げた両手で下半身をたたき落とした。

「ボケエエエエエエエエエ！」

里田は脅威の身体能力で一気に一人を軽々と相手にした

が

里田は自分の背後に人がいるのにきがついた
里田の振り向く暇もなく 里田はやられた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ダツダツダツ 「速く！速くしなきや！ 急がなきや！」

美央が走つてくる

ビルの上にそれをのぞく髪の毛の長い男が立つていた。

「・・・・・・・・」

美央が駆けつけた時に見たモノは・・・里田とキラーの血まみれになつて倒れている姿だつた

「生人！！」

「あ、？」

大量の男の中の一人が振り向いた

「女がこつちくるんじゃねーよ！！」

男は美央に近づき殴りかかってきた、その拳は美央にヒットした
よろめく美央はにやけて言った

「いつたいなー・・・もう」

男は眉間に皺を寄せた「言つとくけど・・・女でも手加減は」
「一丁・・・」

美央は右脚で地面を蹴り男の横に飛んだ 左脚で着地し 曲げた右
脚を回し 力を入れ 男の顔を蹴つた！

「逝きますか！！」

ヒットしたと同時に曲げた足を伸ばして 男の肩に踵を落とした
そして再び 男を蹴り飛ばした

ガシツ

飛んでいった男の頭をつかんだ男が居た

がつちりした体型で 親父シャツを着こなし スキンヘッドに太い
眉毛の男だ

「ばかやろう」

男は頭をつかんだまま 腕を後ろにおもつきし引き 顔を地面にた
たきつけた

「女に攻撃してんじやねーよ！！」

男はたたきつけた血だらけのかおを持ち上げ 放り投げた

「！！」「女に攻撃しちゃいけないってのは・・・いい心構えじゃ
ない・・・」

男はこちちらを睨んだ「攻撃はしねえけど 動けねえようにする事は
できるんだぜ」

「やっぱ心構え悪いね君たち・・・」

「おい持つてきたロープでそいつ縛つとけ」

「押忍！」

男達はロープを美央に縛り付けた

「あんた達・・・なにが望み？」

縛られた状態で美央が聞いた

ガツチリした男が叫んだ「ムウーワからの解放だ！！！！！」

美央は下を向きしゃべらなかつた・・・「・・・・・・・・」
沈黙が流れた

次の瞬間 美央が 頭を上げ 叫んだ

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアカ！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247y/>

生かし屋キラー

2011年11月24日19時49分発行